（1）　第19191号　（明治43年1月25日第3種郵便物認可）

交通評論

8月30日は何の日

土器屋　由紀子

8月30日は「富士山測候所の日」である。1895年のこの日に、気象学者・野中到が、自費を投じて富士山頂剣が峰に小屋を建設し、測候所を開設したことによる。

その後、1932年から72年間にわたり有人の気象観測所として活躍し、富士山レーダー建設後は台風の砦として多く人命を守ったが、気象衛星の発展で気象観測の役目を終え、2004年には無人化され、一昨年には「富士山測候所」の看板も下ろされた。気象庁の観測は自動測器による気象観測などに限られ、正式名称は「富士山特別地域気象観測所」である。

しかし、実は、それだけではない、2006年に「国有財産の効率的な活用を推進するための国有財産法等の一部を改正する法案」が成立し、民間による利用の道が開かれた。我々NPO法人「富士山測候所を活用する会」は気象庁の公募に応募して2007年から測候所庁舎の一部を借用して、大気化学観測を中心とした研究を行っている。

滞在研究は夏の2カ月だけであるが、昨年から、バッテリーによる国立環境研究所による二酸化炭素の通年観測も始まり、東アジアにおける自由対流圏の大気化学観測所としてスタートしようとしている。大気化学以外の「富士山でなければ出来ない研究」も公募しているため、年々希望者が増え今年は延べ467人、21研究グループの計画が行われている。

その中には微量気体、エアロゾル、降水、霧水などの観測研究に加えて、ソーラーパネルによるオキシダントの測定、無線LANを用いたセミリアルタイムのデータ配信、宇宙線の観測、高所医学、高所トレーニング、永久凍土の研究などがある。新しいものとしては建築学の大学院生による極地の居住環境の研究も行われている。

2007年から、夏の2カ月は研究者にとっても、裏方である事務局と山頂管理の山頂班にとっても忙しく緊張した日々となった。

筆者は朝の連絡係であるが、毎朝6時40分になると山頂から連絡が入る。「8月○日、山頂は高曇り。先刻一雨あった。西の方が崩れている。下り坂か。気象庁のデータによると気温5・1度、湿度79%、風は体感で5～8㍍だが、昨日と比べて冷たくない。山頂は登山者で大混雑」「8月×日、昨夜から雷のエコーが強く商用電源を切っていた。長時間の商用断のため、復旧後の装置確認をお願いします。山頂は濃霧。風は少し弱まって5㍍前後。5時ごろは10～15㍍吹いていた。気温5・2度、湿度100%。本日は研究者の登下山なし」

このようなメールが毎日数回、山頂班、研究者と事務局の間を飛び交っている。2007年当時は衛星携帯電話で辛うじて連絡が出来たが、昨年からは放射線医学研究グループの努力で無線LANが使えるようになり、インターネット通信である。

山頂を利用する研究者の登山情報、観測機器の状態、天候不順による登下山の中止や、ブルドーザーによる荷物の情報、研究者の体調不良や、時には一般登山者の遭難救助まで飛び込んでくる。3名の山頂班は現役のアルピニストで気象庁時代の経験者も含まれており、これまで無事故で4年目の夏を終わろうとしている。しかし、NPOによる管理運営には常に資金難と予期せぬ危険がついてまわる。来年のこの日にも野中到の偉業をしのび山頂に灯をともし続けなければならないと考えている。

（江戸川大学名誉教授・元気象大学校教授）